母校をたずねる

受験さなかでもスポーツ

県立浦和高校 2

Jリーグチェアマン 村井満さん 1977年度卒

＝東京都文京区で、内藤絵美撮影

さいたま市は、浦和レッズと大宮アルディージャのJリーグ2チームを擁する「サッカーの街」。埼玉県立浦和高も、サッカーとともに発展した街の歴史に深く関わってきた。サッカー部出身で、現在Jリーグのチェアマンを務める村井満さん(56)＝1977年度卒＝が、サッカーと「恋愛」に明け暮れたという浦高時代を語る。【奥山はるな】

浦和はサッカーに対して、非常に愛の深い街。僕が浦和高のサッカー部にいた当時は、近所のおばちゃんがかっぽう着姿でサッカー部の試合を見に来て「しっかりしろ」なんて声をかけてくれた。キーパーだったので、よく聞こえていて「ゴール裏の文化」を感じました。

入学を決めたのも、サッカーの街・浦和に憧れたから。埼玉県川越市で生まれ、小中学校までバスケットボールをしていたけれど、市立浦和南高をモデルにした漫画「赤き血のイレブン」を読んで、人生が変わった。中学時代に浦和高の学校見学に行くと、男たちが泥だらけになってサッカーやラグビーに打ち込み、イメージにぴったりでした。

この背景には、かつて浦和に師範学校（埼玉大教育学部の前身）が置かれ、その卒業生が教員となってサッカーを伝え広めていったという歴史があります。当時、師範学校と旧制浦和中学校（浦和高の前身）は隣り合っていてサッカーを通した交流も盛んでした。

僕の在学中に監督だった倉持守三郎先生はサッカー部のOBで、1951（昭和26）年に年間52連勝の記録をうち立てたメンバー。この年は国体、高校選手権、関東大会で優勝して3冠王に輝き、黄金期を築きました。

この倉持監督は国際主審をしていて、コーチとして支えた柴田宗宏先生はユースの日本代表。先生も現役なので、練習の合間にグラウンドを走って自分自身のトレーニングをしていたし、指導は「自らがプレーしてみせる」というスタイルでした。

浦和高というと、進学校のイメージがあるけれど、僕は3年間、スポーツと恋愛の記憶しかない。サッカー部のほか、「古河強歩大会」や臨海学校、球技大会といったイベントが目白押しで、年がら年中スポーツしている。週に一度、サッカー部の練習が休みになると、浦和明の星女子高の文化祭で知り合った彼女とデートしていました。その彼女が、今の妻です。

成績は悪かったけれど、高校時代に得たものは、ものすごく大きいです。普通の進学校は、あらゆるものを遮断して勉強をさせるけれど、浦和高は受験の真っ最中でも目白押しでスポーツをやらせ、授業も文系と理系を分けず、とにかく幅広くやる。それは「受験の大事な時こそ、遊べる人間にならないといけないよ」というメッセージだと思う。今になって、その方がいろんな情報が得られるし、物事を深く掘り下げられると実感しています。

社会に出て、各界で活躍するOBの方々にお会いすると、共通しているのは視野の広さ、話題の豊富さ、関心の幅広さ。一芸に秀でる職人になるのもひとつの生き方だけれど、志が高くて視野が広い人が、リーダーになるのではないでしょうか。

むらい・みつる 1959年生まれ。早大法学部を経て83年リクルートに入社。2004年リクルートキャリア社長。08年に日本プロサッカーリーグ理事に就任し、14年から同チェアマンに。日本サッカー協会副会長や日本プロスポーツ協会理事も務める。

「サッカーの街」と共に歩み

51年度には3冠王

1952（昭和27）年、サッカーの全国高校選手権に優勝した時の凱旋（がいせん）パレード＝県立浦和高同窓会提供

さいたま市にサッカーがやってきたのは、1908（明治41）年。現在の同市浦和区にあった埼玉県師範学校に教員として着任した細木史朗氏が蹴球部を創設し、教え子らが教員となって地元で広めた。師範学校の跡地は現在、さいたま市役所となり、「埼玉サッカー発祥の地」と名付けられたブロンズ像が設置されている。

県立浦和高の前身、旧制浦和中学校にサッカー部ができた時期は「はっきりしない」というが、師範学校に蹴球部ができた6年後の14（大正3）年の旧浦和中の交友会誌「麗和会雑誌」に、最も古い記録が残る。両校は試合などを通じて切磋琢磨。旧浦和中サッカー部の活動は太平洋戦争で一時中断するが、終戦後間もなく再開。浦和高サッカー部は49（昭和24）年に国体で優勝して初の全国制覇を成し遂げる。51（昭和26）年度には3冠王（国体、高校選手権、関東大会優勝）に輝き、高校サッカー界の頂点に君臨した。

60年代からは浦和高のライバルとして県立浦和西高、市立浦和高、市立浦和南高が台頭し、しのぎを削った。52～77年の高校選手権大会26回中、11回で浦和勢が全国制覇。「埼玉を制するものは、全国を制す」との言葉が生まれた。

浦和高は、著名な選手も多く輩出。日本サッカー殿堂入りした浅見俊雄氏（33年生まれ）や、第11代日本サッカー協会会長を務めた犬飼基昭氏（42年生まれ）らがいる。

＝次回は15日に掲載します